

雑誌「驢馬」における芥川龍之介と中野重治

菊 地 弘

「驢馬」は大正一五年四月に創刊し、昭和三年五月、一二号を出して廃刊した同人誌である。月数と号数が一致しないのは途中、休刊があるからである。すなわち大正一五年八月と一二月、昭和二年四月より昭和三年一月までの一〇箇月間、及び昭和三年三月、四月は休刊している。

雑誌の題名「驢馬」は堀辰雄の提案による。誌名が決まるまでの経緯を少し長くなるが堀の『二人の友』一 中野重治^(註)を引用して述べてみよう。堀はすでに中野が『波』とか『豪傑』などすばらしい抒情詩を書いたことを紹介して、

話が雑誌の題名のことになった。すると中野は「シャリン」といふのはどうかねと云った。「シャリン？」何のことかみんなには分からなかつた。そしたら彼は「車の輪の車輪だ」と

説明した。そして一人でそれがひどく気に入ってゐるらしかつた。誰かが、それは字面はいいが、言葉では何のことや解らないから駄目だと反対した。それでは「赤繩」といふのはどうだいと彼は再び云つた。それはまた誰かにそれはあんまり君だけの好みであり過ぎる、といつて反対された。その時分、もうすでに、僕等の仲間の中野一人だけが「プロレタリア詩人」になつてゐたのであつた。

雑誌の題は、とうとう「驢馬」といふのに決つた。これは僕がフランス・ジヤムの詩から思ひついた名だつた。僕が最初それを云ひ出した時は「何？ 驢馬か？ はッはッは」と中野が真先になつて笑つたが、みんなはいつかこの名前に愛着を持つやうになつた。そして最後にこれにしようかと云ふことに決まりかけた時、中野は最もそれに賛成した一人だつた。それは、その頃（もちろん今でも変りはないが）みんな

はひどく貧乏してゐたし、それにみんな揃つてあの不幸な動物を歌つたジャムの詩が好きだつたりしてゐたからであつたらう。

と記している。中野一人だけがすでにプロレタリア詩人として映つていたことが見逃せない一文でもある。

中野重治は『驢馬』について

詩を中心とする文学同人誌。誌名は同人堀辰雄の提案にかり、表紙文字は芥川龍之介と親しかつた医師下島空谷が書いた。同人は宮木喜久雄、太田辰夫、堀辰雄、西沢隆二（ひろし・ぬやま）、平木二六、窪川鶴次郎、中野重治、渡辺一、葛巻義敏であつたが、平木は後に同人から退いた。同人は室生犀星のところにあつまつていた雑階級の文学青年からなり、犀星、龍之介、萩原朔太郎を準同人として扱い、これらの三人のほか福士幸次郎、高村光太郎、佐藤惣之助、千家元麿、佐藤春夫なども稿を寄せた。雑誌および同人の全体としての傾向は、しいていえば小ブルジョア的人間主義であり、生活との結びつきを基礎的に認めた上では芸術の独自性を強く主張した。犀星の同人にたいする態度は極めて特徴的で、芸術と人生とにたいする態度を教えずにただ学ぶにまかせる（学ばぬにもまかせろ）というふうであつたから同人は反つて学んだ。『驢馬』は今日なお命のある多少の作を発表し、外国からの翻訳においても新しいものを日本に与えた。同人の多数はのち共産主義に傾き、早く死んだ太田辰夫を除き、病氣

の堀辰雄をも入れて、第二次世界戦では一人の積極的侵略戦争協力者をも出さなかつた。

と、同人の動向と雑誌の性格を明示している。同人各自がたがいの芸術上の立場を認め合うという寛容な人間的な強い絆があつた。また同人たちの動向に関して室生犀星の『驢馬』の人達^(註3)によると、ぬやま・ひろし、宮木喜久雄、窪川鶴次郎、中野重治、堀辰雄の五人が同人の主立つた者で、編集と校正は宮木喜久雄が担当して、編集の会合も宮木の部屋で行なわれたとしてゐる。宮木が紹介もなしにふらりと訪ねてきたことを書き、

そして私の家に西沢隆二（ぬやま・ひろし）と知り合ひ、堀辰雄と知り、中野、窪川と知り合つたのである。『驢馬』の印刷費が東京では高くつくので、金澤の何とか印刷所に懇々^(註4)原稿を送り、宮木は校正その他の用件で度たび金澤に行つた。金澤に中野、窪川の友人で準同人の太田辰夫といふ四高の学生がゐて、宮木はその家に泊り込んで校正をしてゐたのである。同人費は五圓くらゐに覚えてゐるが、印刷製本代に不足分の三四十圓は私が毎月手傳ふことになつてゐたが、宮木の汽車賃も同様私が支拂つた。私の役目は同人費不足の支拂ひだけで、原稿を見るとか編輯の事とかは一切加はらなかつたし、面倒な仲間の話は聞いたこともなかつた。今日は確かに皆が集まつてゐる日だと思つて前を通つても、宮木の部屋には一度もあがらずに通りすぎてゐた。

編輯とか会合の後に時々、夕食をたべに皆が私の家にとか

どかとかやつて来て、夕食を済ませるとまた宮木の部屋に戻つて行くくらゐの事があるだけで、『驢馬』編輯方針の話はあまり出なかつた。(中略) 堀辰雄は月に三四度は田端に現はれ、同人のうちで一等早く芥川龍之介と知り合ひ、お医者であり能書家の下島勲が『驢馬』の表紙の字を書き、表紙一杯の大きな書体にお書き下さいといふ示唆を与へた者は、私であつた。詩のみやこの王様は芥川龍之介であつたが、王様は或る時、劍士中野重治の詩を読んで一度会ひたいと仰せられ、中野は王城ではじめて時めく劍技至らざるなき王様に謁見、王様はひそかに蔵してゐたプロレタリアの詩二三編を中野に示し劍士の機嫌を占うた。(中略) 『驢馬』同人で王城に上つた者は中野と堀の二人が、おもであつた。

と書いてゐる。文末のところでは、堀辰雄一人残して四人は共產党にはいつていつた、室生は私は原稿を書いて食えたからよいが、食えなかつたら仲間に入つていたかも知れないと心境をあかし、敵しい当時の弾圧の手が私の身辺にも及ぶかも知れないと思ひ、覚悟し用心してゐたが、私は踏み込まれなかつた、口の固い友達も誰の名を口にしなかつたのだと、彼等に対する信頼と強い絆を表現して結んでゐる。以上あげた文から観取できることは、『驢馬』同人に向けた室生犀星の慈愛深い心情である。犀星の温かい大きな懐の中に彼等はつまれ詩的精神を、イズムを、形成していったことが知られる。

ところで『驢馬』には芥川の近詠十句と、『横須賀小景』(第

二号)、『僕は』(第九号)、『僕の瑞威から(遺稿)』(第十一号)の三作品が掲載されている。ちなみに十句をあげると

- 偶作
- (1) 庭つちに皐月の蠅の親しさよ
旅情
- (2) しのめの煤ふる中や下の閑
以上創刊号

即景

- (3) 唐棕欄の下葉にのれる雀かな
鶴沼
- (4) 陽炎や棟も落ちたる茅の屋根
悼亡

- (5) 更けまさる火かげやくよひ雛の顔
以上第三号

- (6) 糸萩や風軟かに若葉かな

- (7) さみだれや青柴つめる軒の下
破調 兎も片耳垂るる大暑かな

- (8) 以上第五号

- (9) 据え風呂に頸すぢさする夜寒かな

- (10) 灰捨つる路は槐の莢ばかり
以上第七号

である。この中のいくつかの句は書簡にも入つており、(1)は室生犀星宛(大正一四・一〇・二四)、(2)は室生犀星宛(大正一四・

九・一)、(5)は佐佐木茂索宛(大正一五・四・九)、(7)は平木二六宛(大正一五・五・二二)と室生犀星宛(大正一五・五・二九)、(8)は室生犀星宛(大正一五・五・二九)と佐佐木茂索宛(大正一五・六・一)、芥川は佐佐木への書簡で「この間の句は改作した」として、「破調」の見出しをつけている。(9)は佐佐木茂索宛(大正一五・九・一六)で「頸骨さする」が「頸骨さする」と異同している。(10)は『槐』(大正一五・一一・一)、「美術新論」創刊号)の末尾に「北京」の見出しで載っている。へ鬼も)の句を除いて、整った形式で、ある一点を鮮かに盛る繊細な感覚と才能をうかがえる句である。

『横須賀小景』は「カフェ」「虹」「五分間写真」「小さい泥」の四つのコマからなり、視覚、嗅覚、錯覚、形(脚についた小さな泥のあと)によつて生れた連想をつづる方法で描かれた散文詩である。『僕は』は「誰でもわたしのやうだらうが?」——ジュウル・ルナル)の傍題がある。へ僕)の感情、感覚を露にした人間臭を感じさせる、アフォリズム(石原千秋)である。詩的精神で創られたへ最も詩に近い小説)を主張した芥川のスタンスを考えると、ここでの二作品の出来栄への善し悪しを評価の対象にするよりは、その小説の方法に留意しなければならぬであらう。

芥川の歿後掲載された『僕の瑞威から(遺稿)』は、「信條」「レニン第一」〜「レニン第三」(註)、^註「カイゼル第一」「カイゼル第二」「手」「生存競争」「立ち見」の九節からなるアフォリズムの形式

の詩である。死によつてはじめて娑婆苦から救済される、またレニンを情緒的に捉え、そして対象化する、カイゼルといえども自由意志で行動はとりにくいとする、プロレタリア社会が実現しても餓死者はいるとする認識、優勝劣敗が現実社会の真相であるとする、思想革命者も伝統的美意識から脱することは難しいなど、懐疑的であり、またニヒルな思想に落ち込んでいく心境をうかがわせる「詩」である。

二

一九二〇年代後半は、文学思潮の視点からすると、いわれているように既成文学に、プロレタリア文学の「革命の文学」の主張と、前衛芸術運動の表現改新を唱える「文学の革命」が行した。そのような思潮のなかで、芥川の芸術論理は、いかなる文芸上の作品も「詩的精神」の無いところには成立しないと旗色を鮮明にしている。すなわち「詩的精神」の深淺の度合が芸術作品の価値を決めることは、エッセイ『文芸雑談』(『文藝春秋』昭和二・一)や、昭和二年四月より「改造」に連載する『文芸的な・餘りに文芸的な』で谷崎潤一郎に対して展開された小説の筋論の趣意を探れば明瞭である。芥川は私小説にしても、新傾向の文学にあつても「詩的精神」によつて形象化された作品とみれば首肯するスタンスである。葛西善蔵、瀧井孝作の作品に賛辞を呈したのは美的イメージを作から見出したからである。同じ理由から中野重治の詩に感得したのである。『文芸雑談』

のなかで、

僕は又、プロレタリア文芸にもかなり、希望を持つてゐる。(中略)昨日のプロレタリア文芸は、ただ作家が社会的意識のあることを、唯一無二の条件としてゐた。(中略)批評家達は所謂ブルジョア作家達に社会的意識を持つてと云つてゐる。僕もその言葉に異存などはない、然し又、所謂プロレタリア作家にも詩的精神を持つてと云ひ度いのである。

僕は近頃、斯ういふ希望が徒でなかつたことを感じてゐる。譬へば中野重治の詩などは昨日の所謂プロレタリア作家の作品の様に精彩を欠いたものではない、どこか今迄に類しい、生ぬきの美を具へて居る

と評言しているように、中野の詩に芥川は己のアイデアの美に通うものを見出したのである。それでは芥川のプロレタリア詩に文芸に求めたものは何か、『文芸的な、餘りに文芸的な』の「二十七 プロレタリア文芸」のなかで、〈僕等は時代を超越することとは出来ない。のみならず階級を超越することも出来ない〉とまずアクチュアルな感覚と存在を示現している。その上で芥川は日常生活を拘束するものは思想だけでなく、階級、環境、境遇など驚嘆せすにはいられないほどである、文芸は単にイデオロギイやイズムでは掴めない、複雑に錯綜した意識を具している、新しい文芸を生ずるとすれば、プロレタリア的魂を根底にしたものでなければならぬと強調する。

僕は隅田川の川口に立ち、帆船や達磨船の集まつたのを

見ながら今更のやうに今日の日本に何の表現も受けてゐない「生活の詩」を感じずにはゐられなかつた。かう云ふ「生活の詩」をうたひ上げることがかう云ふ生活者を持たなければならぬ。少くともかう云ふ生活者にずつと同伴してゐなければならぬ筈である。コムニズムやアナキズムの思想を作品の中に加へることは必ずしもむづかしいことではないが、その作品の中に石炭のやうに黒光りする詩的莊嚴を与へるものは畢竟プロレタリア的魂だけである。

と明示する。〈「生活の詩」を歌う、歌うことは生活をそのまま表出するのではない。詩的精神によつて形象化されたイメージを歌うのである。それは〈詩的莊嚴〉の魅力を持つてゐるものでなければならぬ。中野重治は「驢馬」に「北見の海岸」(創刊号)、「夜明け前のさよなら」(第二号)、「ま夜中のせみ」(第三号)、「機関車」の詩題で『歌』(第五号)など、生活感情、感覚に根ざした抒情詩を発表した。哀しさにおいて切実な呼び声があり、燃えたたせる詩情がある。沈潜の中で躍動感をみせる。そのような中野重治の「生活の詩」に芥川龍之介は詩的精神を、魂の美質を見出したのである、あまりに人間的な呼び声として、芥川を感動させたのである。それが先にあげたエッセイの中で中野重治をへ今迄に類しい、生ぬきの美を具へた詩人と評価したゆえんである。

人間的な呼び声は、この時分の芥川が生活の上でも芸術の上でも愛したものである。小品『或社会主義者』は、かつてへ若

い社会主義者であり、詩的な情熱に富んだ「レイブクネヒトを憶ふ」の一篇を發表し自信をいだいていた「彼」が、やがて社会主義から落伍して、今は父親となつて家庭にも生活にも満足しており、若い時代をへ人間的に、恐らくは餘りに人間的に、懐しく思い出すという筋で、芥川の人間性が窺えるものになつてゐる。それと関連づけて言えることは、『侏儒の言葉』の「レニン」(「芸芸春秋」大正一三・三)で

わたしの最も驚いたのはレニンの餘りに当り前の英雄だつたことである。

というように、偶像化しない認識で革命の指導者を扱つてゐることである。それに近似した類だが、『或阿呆の一生』の「三十三英雄」において、アフォリズム形式でレニンを二面的に描き、終連で

君は僕等の東洋が生んだ

草花の匂のする電気機関車だ。――

とあるように、植物的な感覚のうちにレニンを革命の英雄とせず相対化する、芥川のがんがら(感)が窺える。『玄鶴山房』(中央公論)昭和二・一)の終末でレイブクネヒトを読む大学生を描出し、新時代を予測したとか、久板卯之介から社会主義について教えられたとか、一九二四年頃より系統的に社会主義の文献をよくだとかよくいわれる。が、あまりそれらを重視することは芥川(の)思想を歪めてしまう。芥川(の)やさしい人間性と時流への感覚は、プロレタリアへ関心もたせたが、それはマルクス主義が時代の

風潮の一つであるから、無関心ではいられたかつたことによる。しかし芥川の文学思想は時代の思潮のなかで「詩的正義の為に戦」い、一箇の傑作を創出するための詩的精神を所有することであつた。私、心境小説、プロレタリア文学の枠を越えた詩的浄火によつて虚構化された作を、あるいは詩的浄火による「生活の詩」を愛したのである。中野重治の詩などは昨日の所謂プロレタリア作家の作の様に精彩を欠いたものではない」という芥川は、中野の詩に、「生活の詩」を認め「詩的莊嚴」を感じたのである。

(この稿つづく)

註

- (1) 筑摩版『堀辰雄全集第四卷』(昭和五三・一三〇)解題に「昭和五年七月号(七月一日刊)の「詩神」第六卷第七号に、「中野重治と僕」と題して發表された」とある。
- (2) 『世界現代詩辞典』(一九五二・一三〇)、創元社に発表、「中野重治全集第二七卷」(一九七九・六・二九、筑摩書房)所収。
- (3) 『室生犀星全集第二卷』(昭和四一・八・三〇、新潮社)所収
- (4) 中野重治は「芥川氏のことなど」(「芸術に関する走り書」昭和四・九・一〇、改造社)及び小説「むらぎも」(昭和三〇・五・一五、講談社)の「九」、「十」に芥川(むらぎも)では葛飾仲太郎宅を訪問したことを書いてゐる。中野の印象、思想的立場が説かれている。すなわち、ヴォルテールの家の窓から「彼」が高い山を見上げてゐると、その山道を執拗に登りつづける人の姿があつた。「彼」は夜になつてその姿を思い浮べ、次のような傾向詩を書いたとしてゐる。
- (6) 岩波版『芥川龍之介全集第八卷』の後記によると、昭和二年(一九

二七年)一月三日の「東京日日新聞」および同月四日の「大阪毎日新聞」に「或人から聞いた話」の題で掲載され、のち『或社会主義者』と題を改めて『湖南の扇』に収められたとある。

(7) 拙著『芥川龍之介―表現と存在―』(平成六・一・二〇、明治書院)の「或阿呆の一生」―芸術と宿命―の章を参照していただければさ
いわいである。